

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2682 号

Native liver survivors of portoenterostomy for biliary atresia with excellent outcome:
redefining "successful" portoenterostomy

胆道閉鎖症肝門部腸吻合術後に経過が極めて良好な自己肝生存例の検討 - 肝門部腸吻合の
「成功」を再定義する

坪井 浩一 (つばい こういち)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、胆道閉鎖症肝門部腸吻合術後において、血液生化学検査（アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ・アラニンアミノトランスフェラーゼ・総ビリルビン・コリンエステラーゼ・血小板）に異常を認めず、門脈圧亢進症を認めない自己肝生存例（Native Liver Survival: NLS）、すなわち Excellent Outcome (EO) 症例の特徴とその頻度を後方視的に検討した論文である。EO 以外の自己肝生存例（NLS）、すなわち non-EO 症例を NLS-2: 血液生化学検査に異常を認めるも PHT を呈さない群、NLS-3: 血液生化学検査は正常であるも PHT を呈する群、NLS-4: 血液生化学検査異常かつ PHT を呈する群としている。1989 年から 2022 年までの 6 歳以上の胆道閉鎖症患者 92 症例を対象としているが、うち 55 例 (59.8%) に肝移植が施行され、自己肝生存は 37 例 (40.2%) であり、EO は僅か 10 例 (10/92: 10.9%) のみであった。NLS-2, NLS-3, NLS-4 をそれぞれ 8 例、6 例、13 例に認めている。自己肝生存例（NLS）の術後観察期間は 6.0~32.0 年（中央値 17.0 年）であった。EO 症例では non-EO 症例に比し、灰白色便や黄疸の発現が有意に早く（13.0 日 vs 32.0 日, $p=0.01$ ）、また、術後短期間で減黄が得られている（34.5 日 vs 56.0 日, $p<0.001$ ）。門脈圧亢進症の有無での比較では、門脈圧亢進症（-）症例（EO・NLS-2）で、門脈圧亢進症（+）症例（NLS-3・NLS-4）に比し、術後早期に減黄を認めている（35.5 日 vs 57.0 日, $p<0.001$ ）。本研究で我々が胆道閉鎖症に対する肝門部腸吻合の成功例は EO 症例であることを初めて提唱し、自己肝生存 EO 症例の特徴とその頻度を初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。